

3. 「東亜同文書院中華学生部の展開と歴史的役割」

水谷尚子(中央大学非常勤講師)

【座長】 後半を進めさせていただきます。次のご発表は水谷尚子先生です。水谷先生は日本女子大学の大学院博士課程を終えられ、上海の復旦大学、それから北京の中国人民大学に留学経験があり、近現代日中関係史と現代中国事情がご専門です。東亜同文書院に関しましては、今日お話しいただきます中華学生部に関するご研究で、1998年に東亜同文書院記念基金会の研究奨励賞を受賞されています。また、先ほど(控え室で)伺ったお話ですと、最近のお仕事では中国から亡命したウイグル人たちの口述をまとめた『中国を追われたウイグル人-亡命者が語る政治弾圧』があり、毎日新聞社主催の「アジア・太平洋賞」の特別賞を今月に受賞されたそうです。おめでとうございます。それではお願いします。

【水谷】 ご紹介にあずかりました水谷と申します。同文書院のことを研究しておりましたのは相当前でして、シンポのお話を頂いてから昔読んだ資料を引っ張り出して慌てて読むという状況で、しばらくは「リハビリ」が必要でした。資料を見返して、もっと活字にしておかなければいけない事象がたくさんあったのにと反省しました。これを機会に今後、同文書院についても以前のように執筆したいと思っております。

先ほどの阿部先生のご発表では、東亜同文会による中国人の教育事業について大学史、制度史、それから経営史の立場からお話いただいたので、私は人的な側面から東亜同文書院中華学生部を捉えて、その歴史を追っていきたいと思います。

私の背景のスクリーンに「イケメンのお兄さん」の写真がございます(図①)。私は修士論文を「東亜同文書院に学んだ中国人-中華学生部の左翼学生」という題で書きました。この修論を書く



図① 史惠康さん

きっかけとなったのがこのカッコイイ史惠康さんです。

私は上海の復旦大学歴史学科に留学した当時、同文書院中華学生部に興味を持っていたのですが、その卒業生に会いたいと思っていたのですが、全く糸口がなかったんです。この「悩み」を私の指導教官だった呉傑先生に打ち明けたところ、「東亜同文書院に学んだ中国人は、まだ何人か上海に生きていますよ」と紹介して下さい、その1人が上海社会科学院の経済学研究所教授、史惠康さんだったわけです。この人をきっかけに、私はさまざまな中華学生部の卒業生にめぐりあうことができました。キムタクに似た写真は、史さんが同文書院に学んだ頃に撮影したとのこと。残念ながら私が出会った時の史さんはこんな感じ(図②)でして、「60年前にお会いしたかった」と申ししたところ、苦笑なさってました。余談ですが論文指導をして頂いた呉傑先生は、戦時中に京大を卒業して日本語が流暢で、学内ではずば抜けて優秀な教



図② 史恵康さん

授だったのに、戦時期に周仏海の秘書を務めたことが原因で、ずっと地位は副教授のままで、退職間際にやっと教授の地位を得られたという方でした。上海には呉先生や史さんら、日本留学組の知日派中国人ネットワークがあったんですね。

私が修論を書いていたのは1993年頃です。今からもう15年ぐらい前で、中華学生部で学んだ中国人への聞き取りは、あまり年齢を知られたくないのですが20歳代にしていた作業です。今から思えば、あれが時代的に限界だったなと。私がお会いした中華学生部関係者はあの当方で皆さん80歳を越えてらっしゃったので、現在はもう全員お亡くなりになってしまいました。留学していた1990年代初めは日中関係もまだ良好で、改革開放期の中国では文書公開が進んできていて、史料収集にとって良き時代に上海で学べて、私は幸運でした。

私は今までずっと中国人への聞き取り～口述史の収集～をライフワークとしてやっていて、同文書院の卒業生への聞き取り以外に、戦中戦後対日工作に携わった中国人、戦争中に日本人捕虜の面倒を見た中国人、最近ではウイグル人亡命者の聞き取りなどやっていますが、一番初めに中国人の

本格的な聞き取りをしたのはこの史先生だったのです。初めて会いに行く時に一生懸命中国語で質問事項を作って、発音練習をしてから鼻息あらく会いにいったんですけども、開口一番同文書院で学んだ流暢な日本語で、「おそらくあなたの中国語よりも私の日本語のほうが少し上手かも知れませんが、日本語でお話ししましょうか」と言われて半分がっかり、半分胸をなで下ろしました。史先生は美しい日本語で、「私の言葉は上海訛りなのであなたは聞き取れないよ。それに普通話(中国語共通語)は上手なくてね。だから日本語で話そうね」と仰いました。そういうわけで私にとって大変思い出深い方なので、今でも机の上に、もうお亡くなりになった史先生の写真をずっと飾り続けております。

前置きが長くなりました。まず中華学生部とは何なのかという話をしておきましょう。ご周知の通り東亜同文書院は1901年上海に建設されて、1945年の日本の敗戦と同時に廃校になっています。「中外の実学を講じて中日の英才を教える」という東亜同文書院の建学方針を文字通り実現するため、日本人のみならず中国人学生を受入れるために、1920年9月に中華学生部が設立されたのですが、わずか14年後の1934年3月廃止となります。この間に入学した中国人学生数は約400人で、卒業生は48人。日本人学生の場合、約4千数百人が卒業したと言われますから、それと比較すれば少ない数だと言えます。

ちょっと年表を見てみてください。まず一番右の「世の中の動き」というところ。ちょうど中華学生部が増設される1920年頃というのは、日本はまだ大正デモクラシーの時期で、多少なりとも自由な空気が残っていた時代です。しかし20年3月には株式相場の暴落が起こり、このまま経済が傾いて27年には金融恐慌、そして29年には世界恐慌が始まります。不況を乗り切る手段の1つとして日本は中国への侵略姿勢を強めていくわけ

です。27年に第1次山東出兵。31年には南満洲鉄道で地元大物軍閥・張作霖を爆殺。32年に満洲国建国。そして中華学生部が廃止が決定されるのは34年です。つまり中華学生部というのは対華21ヶ条の要求の後、日中関係が本格的に悪化する30年代までの、ちょうど隙間に設置されていることとなります。通しでわずか15年間ですが、戦争前の何とか自由な雰囲気があった時代に存在していたということが、世界の動きから見てとれるわけです。この間は日中両国の学生が、語学などの授業以外では席を並べて、書院の学舎で共に経済や貿易、商学を学んでいたのです。

同文書院の日本人卒業生は、皆様ご存じのように実業界、貿易、外交、教育界、ジャーナリズム等々、様々な分野で活躍しました。そして優秀多彩な人材を輩出したことで、同校は名を知られ、歴史を語り継がれているのです。私はそんな日本人卒業生群像に対して中国人卒業生像が全く見えてこないことを、いぶかしく思っていました。

同文書院の日本人関係者は、個人史の類を随分たくさん出版しております。卒業生の同窓会である滬友会が出版した『東亜同文書院大学史』や、卒業年度別に編纂された多くの回想録にも、日本人については詳細な記述がございしますが、中国人学生に関する記述はさして多くありません。それから大学の学籍簿なんですけれども、私は論文執筆時に愛知大学に探しにきたんですが、中華学生部の学籍名簿は残されておりました。日本人学生のみならず台湾籍、朝鮮籍のような元日本の植民地だった学生の名簿は残っておりますが、中国籍学生の個人データというのが全然残っていない。どうやら書院の校舎を国民政府が接収したとき、中国人学生名簿も教育部が持っていったようです。「手がかりは日本にはない。これは中国で生きていっしょ卒業生に名前を聞いて、彼らがどういう人生を送ったのか、一人一人しらみつぶしにあたっていくしかない」と腹を決め、作業を始めたわけです。

さて、再度、年表をご覧ください。真中の列です。線を縦に引いてあって、その横に中国人の名前が書いてあります。中華学生部に在籍していた学生の内、経歴がはっきりと分かって、しかも特徴的な生涯を送った人物をここに書き連ねてみました。上から順番に紹介していきます。

梅電龍(図③)・馮攸・鄧雲衛の3人は、22年から26年まで中華学生部で真面目に学んで卒業していった学生で、いずれも日本語の語学力を活かした職に就いています。馮攸は中国領事館の横浜領事になり、日中戦争が終わってから、国民党と共に台湾に渡りました。鄧雲衛も中国領事館の神戸領事でしたが、日中戦争後は結核で早世しております。鄧雲衛の弟さんが当時上海にご存命で、弟さんは同文書院卒業ではないんですが、お会いしてお兄さんの思い出などを聞き取ることができました。弟さんは国民党のCCと呼ばれる特務機関に勤めていたがために、中華人民共和国になってからドイツ人の妻と強制的に離婚させられたり、十年以上に及ぶ労働改造所経験をするなどずいぶん苦勞をなさったようです。梅電龍は中華学生部の歴史を語るのに重要なキーパーソンなので、あとでゆっくりお話しいたします。



図③ 梅電龍

彭盛木は23年から27年まで在籍し、卒業後は同文書院の中国語教員となって日本人学生に中国語を教えております。日中戦争期、彼は日本語の高い能力をかわれて日本軍と汪精衛との間の通訳をするようになりますが、重慶の国民党に通じていることが日本軍にばれて、青酸カリで殺害されました。

周憲文は卒業後、京都帝大に留学し、その後は中国人留学生を監督する国民政府の官僚となって日本に残り、終戦後は浙江省出身ながら大陸には帰らないで台湾に渡り、台湾大学で経済学教授となって一生を終えております。

周伯棟も上海の復旦大学で経済学教授となり、学者として名をなした人物です。周は入学時、他の学生より若干歳をとってまして、中華書局という左翼系出版社に編集者として勤務しながら書院で学んだ苦学生だったようです。

この周伯棟と史恵康さん、それに孫宜生の三人が共著で、「関于東亜同文書院（東亜同文書院について）」という文章を発表しています。文革が始まる2年前の1964年5月に政治協商会議上海市委員会が発行した『上海文史』の中で、吉宜康の筆名で、詳細な東亜同文書院の説明と中華学生部の思い出を記しているのです。「康」は史恵康、「宜」は孫宜生、「吉」は周伯棟のことです。ちなみに孫宜生は中華学生部閉鎖時に在学していて、早稲田大学に留学し、上海科技大学の日本語教授となった方ですが、文革中に日本のスパイだ漢奸だと紅衛兵にインネンをつけられて、自殺しております。この文章には、同文書院史、中華学生部の教育や授業内容、日常生活と同窓生についてなどが、いかにも学者3人の筆らしく淡々と綴られていました。

葉作舟も経済学者です。浙江省の生まれで、杭州大学の経済学教授でした。この方も周伯棟と同じように、入学時に雑誌『東方雑誌』の編集者をしてしながら、大学で学んだ苦学生でした。

胡宣同は、同文書院を卒業しないで中途退学の形で日本の慶応に留学し、帰国後は銀行員になった人です。

沙文漢（図④）。この人は中華学生部に入る前に散々左翼運動をやって、国民政府に目を付けられていたお尋ね者で、蒋介石が共産党員を大粛清した上海クーデターの後、身の安全を確保するために一種の隠れ蓑として同文書院に入学してきたので、学業にはあまり熱心ではなかったようです。1年半ぐらい在籍した後に除籍となり、ソ連のモスクワ中山大学に留学しております。彼はコミュニストとして名を成した人で、中華学生部の学生のうち、中国共産党員としては一番出世しました。最後は浙江省の省長まで上りつめております。



図④ 沙文漢

呉渤は版画を彫る芸術家として名を知られ、作家や翻訳者としても活躍した芸術家肌の人でした。曹芸は人民解放軍の軍人です。呉渤も曹芸も書院にあまり長く在籍しておらず、満洲事変が始まると同時に日本への抗議の退学をしております。

以上のように、史先生をきっかけとする追跡実地調査で判明したのは、日本の学生に勝るとも劣らないほどの人材が、中華学生部の中国人学生か



ら巢立っていたという事実でした。ただ、いまご紹介した中国人学生の経歴でお気づきだと思いますが、東亜同文書院という日本の高等教育機関に学んだが故に、戦時中に日本軍に殺害された者、文化大革命の時代に「漢奸だ、日本のスパイだ」とそしられ自殺した者が少なからずいたのです。中国における知日派の苦難の歴史に想いをはせて、心が痛みました。

次に中華学生部の歴史を、図表左の上から順番に見ていきましょう。

先ほど阿部先生がおっしゃった通り、時代的、社会的背景から、中華学生部は波乱続きでした。1918年に中華学生部の併設が決定。1920年に開学しますと、その翌年に中国共産党が上海で結党され、少なからぬ書院の中国人学生が、中国共産党と深く関わっていくようになります。

1924年には列強の中国侵略に国を挙げて抵抗するため、国民党と中国共産党が「第一次国共合作」関係を結びます。この頃、中華学生部の中国人には、国民党と共産党の両方の党籍を取得して、書院に学びながら社会運動に従事していた者が沢山いました。ところが1927年、蒋介石が上海クーデターを起こして共産党員を殺害し、翌28年蒋介石は中華民国の実権を握って国民政府主席に就任。国共合作は崩壊します。この時、中華学生部の学生寮は、若い中国人左翼活動家たちのアジトと化していたようです。史さんは「同文書院の宿舍の管理は緩やかで、外部から友人や家族が来ても時間を気にせずに話げできた。彼らが泊まっても大学から何のお咎めもなかった。欧米系の大学にも見られない、他に類を見ない自由さがあった」と証言していました。国民政府の公安からも租界警察の手からも逃れられる避難場所として、寮が機能していたようですね。そして先ほどご紹介した沙文漢のような学生も、書院に入学してくるのです。

1931年に満洲事変が勃発すると、日本への抗

議のため、中国人学生が次々に書院を退学していききました。経営母体側も中華学生部を存続させるのは不可能だと判断し、1934年に最後の卒業生を送り出して、中華学生部は15年の歴史の幕を下ろします。中華学生部は、このような時代の流れに大きく翻弄され、消滅したのです。

それでは、さらに中華学生部と中国共産党との関係を追っていきましょう。

1921年中国人学生募集に尽力したのは、書院中華学生部所属の清水董三教授でした。清水董三は思想的にはマルキストではありませんが、ずいぶん中華学生部の左翼学生のために頭を痛め、彼らを庇い続けた教員です。たとえば書院の卒業生で中国共産党員の梅電龍が日本国内に偽名で渡航して特高に捕まった時、身元引受人になったのは清水でした。中国人左翼学生が租界警察に捕まったり、日本の警察に捕まったりした時、何度も身元引受人になった書院教授の1人です。

1922年国共両党が共同で、革命幹部の養成を目的に上海大学という学校を作ったのですが、ここに書院の少なからぬ中国人学生が聴講に訪れています。上海大学はいわゆる左翼学生の牙城だったところで、学内には中国共産党支部が建設されていました。校長は于右任と鄧中夏、社会科学系主任が瞿秋白という著名な共産党員です。上海大学は1927年に廃校となっていますので存在期間は短かったのですが、中国においてマルクス・レーニン主義の伝播と宣伝に果たした役割は大きく、中国共産党史に名を残しています。この学校に聴講に通っていた書院中華学生部の学生には、梅電龍、高爾松、呉開先、袁文彰らがいます。書院で寝起きをして日本語はちゃんと学ぶのだけれど、商学など他の教科に関しては不真面目で、上海大学に通い詰める学生がけっこういたと、上海大学史の回想録に彼らについて述べた記録が見られます。中には書院を中退して上海大学に転学する者もいました。

雑誌『上海学生』（発行時期は1923年～25年）や新聞『民国日報』副刊行物「覚悟」（発行時期は1919年～29年）など、当時、中国共産党の息のかかった左翼系出版物にも、書院の中国人学生の投稿が多く見られます。

なぜこんなことになったかについて、私は先に述べた吉宜康の回想録から回答を見出しております。「冬には暖をとるための火鉢や木炭が供与され、自炊設備もあり、入浴は毎日できた。このような生活の快適さに、われわれの豊かな学生生活というのは同胞から搾り取られた義和団事件などの賠償金から成り立っているのだと、若者らしい懐疑心と贖罪意識を持った」と。実際、同文書院の学費は非常に安くて、私が当時の出版物『教育雑誌』から調べたところによると、アメリカ系の滬江大学、ドイツ系の同済大学などは、学費・年間納付金がだいたい200円を超えていたのに対して、中華学生部の学費は年間わずか50円。4分の1の金額で大学教育を受けられたわけです。宿舍費とか諸経費を全部合わせても140円かからなかった。国民党の国立大学・中央大学医学院が260円です。それから考えても中華学生部の値段の安さが窺えると思います。吉宜康によれば「中華学生部の学生の大部分は貧しかった。日本語を学びたいと望んで入学してきたのではなく、費用があまりかからなくて生活条件が良いことに惹かれて入学してきた学生が多かった」。こういう学生が中国共産党や左翼思想に接近するには、あまり時間がかからなかったようです。また、当時の中国の対日感情の悪さ、排日気運の高まりが、よけいに書院の中国人学生を「革命的行動」に向かわせた面もありましょう。吉宜康は次のようにも述べています。「学生がいくら左翼運動にうつつをぬかしても、大学運営そのものを糾弾するのではなく、いわゆる中国の社会改革運動の限りであれば、書院の先生方は鷹揚に我慢をしていた」。

ではまた、時代を追っていきましょう。1924

年に同文書院中華学生部の中に自治組織「中華学生会」が結成されます。同じ時期にやはり中華学生部の中には、中国共産党の関連組織である「中国社会主義青年団・上海第11支部」ができてまして、設立時の参加者は全て書院の中国人学生だったことから、「徐家匯支部」とも「同文書院支部」とも呼ばれていたそうです。実際のところ「中華学生会」と「中国社会主義青年団・上海第11支部」はほぼ同じ組織であり、両方の会長・支部長は梅電龍でした。梅電龍は授業はちゃんと出る、日本語も勉強する、しかし共産党の地下活動も盛んにするという優秀で「多芸な」学生だったようです。この時期の書院の中国人学生運動のリーダーが梅電龍であったことは、ほぼ間違いないでしょう。ちなみに当時上海にあった中国社会主義青年団の支部は、全部合わせても僅か11個なんです。その中の最後の支部が同文書院というのは、つまり共産党にとって中華学生部は、若い青年をオルグするための相当重要な拠点だったということではないでしょうか。

翌1925年、「中国社会主義青年団」は「共青团（中国共産主義青年団）」と名前を改称します。そして、それと同時に第11支部に所属していた者は、全員中国共産党の党籍を得て、ここで中華学生部に中国共産党の正式な細胞が誕生しました。党支部と团支部長は梅電龍が兼任しました。

梅電龍は同郷の著名な初期共産党員である惲代英の影響を強く受けており、惲が29年国民党によって逮捕、31年に殺害されるまでずっと行動を共にしてきました。1924年に惲代英が欧米の中国侵略を糾弾する「反キリスト教運動」と「教育権回収運動」を始めると、梅も同文書院の中で『非基督教』という小冊子を作成し配布します。冊子の原本を私は上海市档案馆で見つけました。これは同文書院の中華学生部寮が「反キリスト教運動」の地下基地になっていた証拠となりえます。教育権の回収運動については阿部先生もお話しになっていましたが、この時代、欧米のキリスト教諸



国がキリスト教教育を行なうことによって、中国人の意識を変革しようとしていたわけで、それへの反対運動は欧米人の多い上海の租界地域ではなかなかできないわけです。国民党側に知れても捕まってしまう。一番安全なのは、なんと日本の教育機関ということで、東亜同文書院の中に「反・欧米帝国主義」運動の拠点の一つが築かれていたことになります。1925年の暮れ、中華学生部の学生部長にクリスチャンである坂本義孝が就任します。梅電龍らは坂本先生がキリスト教徒だと知っていても、それでも中華学生部宿舎を連絡所として冊子を発行しました。

社会運動については行動的な梅電龍ですが、書院の学舎では沙文漢と違って「よい学生」だったようです。ちゃんと卒業してますし、穏やかで物静かで、革命家と言うより読書を好む学者肌の人物だったと言われております。彼は後に地下黨員として、国民党革命委員会の中に入り、中国共産党にシンパシーを持つ人を引っぱってくるとか、香港や南方華僑工作に従事しました。

1926年に梅電龍が卒業すると、それから中華学生部の運動の指導者（リーダー）となったのが王学文です。王学文は東京同文書院を卒業したあと京都大学で河上肇に学び、1927年に帰国します。1927年は蒋介石が共産黨員を大粛清し、上海の中共組織が壊滅的打撃を受けた年です。王学文は表では上海法政大学などで政治経済を教えながら、裏では中国共産党江蘇省委員会宣伝部の工作員として、沙文漢とともに地下活動を始めます。

1928年春、王学文は、西里龍夫ら書院の日本人学生が結成した「中国社会科学研究会」に招かれます。王は書院の日中両国学生に、反帝国主義・反侵略の運動に参加するよう呼びかけ、組織化を手伝い、書院の学生組織と党中央との連絡係となりました。1929年には共青团の「同文書院日本人学生団支部」が結成されています。この時期、同文書院のあった地区を統括する共青团上海法南

区委員会の書記という地位にあったのが沙文漢です。1930年には書院の日本人卒業生である西里や安斉庫治たちが、「日支闘争同盟」の名で、日本海軍陸戦隊の兵士に反戦ビラを配布する「事件」が発生し、逮捕者を出しまして、その背景は王学文たちだろうと言われております。王学文の地下活動・つまり東亜同文書院の両国学生に、反戦活動に従事するよう働きかける工作・は、中華学生部の廃止まで続きます。日中戦争が始まると、王学文は中国共産党の革命聖地・陝西省の延安に赴き、日本人捕虜の思想教育を担当する役職などに就きました。

1930年書院の学校当局は、日本人学生の間には共産主義思想が拡大することを恐れ、共青团リーダーだった二人の中国人学生を退学処分にします。このニュースは当時の上海の新聞に大きく報道されました。特に中国共産党の機関紙である『紅旗日報』は、退学という措置を執った書院の運営方針を不満とする日中両学生がおこした大規模授業ストライキを、連日のように報道しています。

1931年8月、書院の経営母体である東亜同文会は、中華学生部の廃止を決定します。前年の学生ストと、日本人学生を巻き込んだ「祖国解放運動」への懸念による結果だと思われます。

1931年は満洲事変の起こった年でもあり、同年秋には中国人学生が集団で授業ボイコットをしまして、上海の各新聞がこれを報道しました。中国人学生の自治組織「中華学生会」は新聞『申報』に満洲事変への抗議声明を発表し、上海の各大学生が結成した大学抗日救国連合会に参加して、「中国人学生総退学」を決議しています。ところが、あれだけ「反日、抗日」とやっておきながら、実は学生たちはちゃっかりしてて、何とかうまく有名大学に転学できないか、あるいは日本の大学に転学できないかと随分奔走しているんです。廃校が決まってからの学校当局は、中国人学生たちの受入れ先を探すのに尽力してますし、学生も建設

的な将来に繋がる行き先を探したのですね。ちなみに史恵康さんは、満洲事変勃発時には「日本帝国主義に反対する」とデモで旗を振ったようですが、廃校後は日本の大学に留学しています。

1932年に発生した上海事変を機に、同文書院の日本人学生の間で、反戦活動が再燃し、激化します。書院の日本人学生数名が、中国共産党江蘇省軍事委員会の指導する「中国共産党外国兵士委員会」に所属して、日本の軍人に反戦ビラを撒くなどの活動をしていたのです。党と書院との橋渡しをしていた中国人学生・汪孝達が国民政府に逮捕されて、運動は消滅しました。

同文書院中華学生部の歴史的流れを、ざっと見て頂きました。そろそろ結論にいきましょう。

中国共産党にシンパシーを感じて、党の影響下に社会運動をしていた中華学生部の中国人学生は少なくなかったのですが、全体的を見渡してみると、中国共産党のトップまで上り詰めたのは沙文漢ぐらいでした。梅電龍も最後はずいぶん文革で叩かれて、ひどい目にあって労働改造所で殺されるように人生を終えております。やはりそれは東亜同文書院で学んだという経歴が、その後の人生に少なからず影響を与えていることは確かです。

1993年に私は上海で、書院で学んだ中国人のお爺さんを集めて、「同校友会」を開きました。当時、ホテルオークラ系の花園飯店でコンシェルジュをなさった書院の日本人卒業生、幅館さんという方が出資してくださって、叶った「同校友会」でした。その場に集まった史恵康さん、胡宣同たちが口々に言ったのは、「同文書院は良い大学だったよ」という台詞です。私はまさか中国人から1990年代の前半に、そういう話を聞くとはいわなかった。改革開放が始まって軌道に乗った時期ではありませんが、「たとえそう思っていたとしても、同文書院は中国侵略の先兵養成学校だったとでも、語られるのではないかと、先入観があったのです。こちらの想像に反して、彼らは口々に「今か

ら考えたとしても良い大学だった」と話してくれたのが大変印象的でした。「時代が時代でなければ同文書院という学校は非常にユニークで理想的な教育機関だった。今のような平和な時代にこそ、国家的な野心がなく両国の若い人が学ぶこういう機関があればいいと思う」と皆さん語ってらっしゃいました。

中国の書物の中では「日本の侵略機関」と糾弾されることも多い東亜同文書院ですが、実際に学んだ中国人学生は、「そんなに簡単に一言で片づけられる学校ではなかったんだよ」という評価を下したのです。

では時間ですから、この辺で、私の話は終わりたいと思います。

【座長】 どうも水谷先生ありがとうございました。中華学生部で学んだ学生達とその後の優れた人材としての活躍を時代背景とともにお話しいただきました。何か質問がございましたら。はいどうぞ。

【村上】 東亜同文書院卒業生の同窓会で滬友会というのがありますけれども、私の親父が同文書院の卒業生で、私はその準会員です。うちの親父は1900年生まれですから、ちょうど同文書院ができた時に生まれたという関係で、18歳で18期になりまして、そのあと中華学生部の助教授になっております。父から聞いている中華学生部の学生のうち、今先生がおっしゃった梅電龍の名前だけは、その後もちょいちょいお目にかかっているので覚えています。他の人の名前は私が記憶してなかったということもあるんでしょうけれども。もしお分かりになればお聞きしたいんですが、うちの父がその当時のことを思い出して書いている文章の中に、「毛沢東は彼らの視野の中に登場していなかったが、おそらくこのあたりで学生運動を指導・指揮していたのかも知れない。日本では福田得三とか河上肇の時代であった。西田

幾多郎の『善の研究』や倉田百三の『出家とその弟子』、『愛と認識との出発』が読まれていた。マルクスの漢訳本がなかった中国には、西欧思潮が日本を通じて流れ込んできた。彼は後年、この時ほど希望に満ちた時代はなかったと語った。彼は新しい中国の胎動を中国学生と共に呼吸した」というようなことを書いているんですが、今挙げた倉田百三とか河上肇というような人達の書いたものを教材として使ったんじゃないかろうかというようなことを、私はそれほどはっきり聞いたわけではないんですけども想像しているわけです。先生が聞き取りをなさった中で、いったいどういう授業を受けていたのか、単に日本の語学の勉強だけだったのか、あるいはそういった日本の学問的な風潮なども教えたのか。私の父親は23～24歳ぐらいで中華学生部の助教授ということをやったと思うんですが、どういうことを教えたのか、もし分かればお聞かせいただければありがたいと思います。

【水谷】 お父さまのお名前は何とおっしゃるんですか。

【村上】 18期の村上徳太郎と言います。中山優先生は17期でしたし、今の清水董三先生なんか私もよく知っています。皆さんだいたい似たよ

うな年代だったと思います。

【水谷】 私はどういう授業をしていたかは聞きとってなくてお答えできないので残念なのですが、ただ経済学に関しては日本人の学生と一緒に学んだと。日本語の授業でどういう教材が使われていたかというのは、ちょっと分かりません。ごめんなさい。ただそれ以外にずいぶん日本の左翼文献を読む、いわゆる読書会というのを四六時中やっていたという話は皆さんなさってますね。それから、梅電龍は物静かな人で、日本人の学生や先生方とも決して対立しない人物だったらしいんですが、その後彼は中国共産党の地下黨員として、たとえば福建の人民政府の組織に参加したり、いろんなことをしていて、そのたびに現地の日本軍との交渉役になったり、同文書院の人脈をたどって軍の中に同文書院の卒業生がいたら話をするとか、そういうことをしていたみたいです。だから日本側も彼が中国側でどういう役割か分かっているながら、交流を持っていたという面では、立場や国や望んでいることは違っても、お互い何とか糸口を掴もうと行動したという面では、両国の若者とも変わらないのではないかなと思って。梅電龍の話をし始めるとかなり長くなるのですが、なかなか面白い人物だと思っております。

東亜同文書院中華学生部の展開と歴史的役割

2008.11.2 中央大学非常勤講師 水谷尚子

| | 東亜同文書院中華学生部の歴史 | | 世の中の動き |
|------|---|-------------|---|
| 1901 | ・東亜同文書院創設（在上海） | | |
| 1918 | 中華学生部併設決定 | | 大正デモクラシー |
| 1920 | 中華学生部増設「中外の実学を講じて駐日の英才を教え」 | | |
| 1921 | 中国人学生募集には清水董三教授らが尽力 | | ㊸中国共産党結成 |
| 1922 | 大村欣一教授、中華学生部長に就任 | ㊹梅電龍・馮攸・鄧雲衛 | ㊸上海大学創設 7月日本共産党結成 |
| 1923 | 最初の学生運動「旅順・大連回収運動」がおこり、中国人学生4名が退学処分となる 上海学連定期刊行物「上海学生」（23 - 25）に書院中国人学生名の投稿が多数掲載される 書院から上海大学へ聴講に行く学生が増え、中には上海大学に転学する者も | | 9月関東大震災 |
| 1924 | 5月 自治組織「中華学生会」結成 五四記念集會に学生会が参加 同月 中華学生部内に「中国社会主义青年団・上海第11支部（徐家ワイ支部とも同文書院支部とも呼ばれた）」が結成される 支部書記長は梅電龍 この頃「民国日報」副刊「覚悟」に梅ら書院生の名が頻繁に見受けられる | ㊺彭盛木 | ㊸1月第一次国共合作 |
| 1925 | 最初の卒業生は2名。この年、中国人学生の日本見学旅行が実施され、引率は清水董三教授。9月大村教授の死去に伴い、12月から坂本義孝教授、中華学生部長となる 中国社会主义青年団が中国共産主義青年団と改称、中国共産党支部が中華学生部内に結成される 「非基督教運動」の非公開基地となり、梅電龍らが小冊子「反对基督教」を中華学生部宿舍を「連絡所」として発行 | ㊻周憲文 | ㊸5.30事件 4月治安維持法公布 |
| 1926 | 卒業生5名 日本見学旅行実施 | ㊼周伯樑 | 12月大正天皇死去 昭和へ |
| 1927 | 卒業生10名 坂本教授等の引率で日本見学旅行 王学文の帰国→日中両学生へ左翼運動を働きかけ | ㊽葉作舟 | 3月金融恐慌・ ㊸4月上海クーデター・ 国共合作解消 5月第一次山東出兵 |
| 1928 | 卒業生10名 春、日本人学生の「中国社会科学研究会」に王学文が招かれる | ㊾沙文漢 | ㊸10月蒋介石、國民政府主席就任 |
| 1929 | 卒業生5名 日本見学旅行実施 「中国共産主義青年団・同文書院日本人学生支部」結成、この時、上海法南区共青団書記は沙文漢 | ㊿胡宣周 | 10月世界恐慌 |
| 1930 | 卒業生4名 日中両学生による「日支闘争同盟」結成 学校当局が中国人学生で共青団リーダーだった2学生を退学処分とする→中華学生部が中国共産党の書院への浸透窓口となっていたことを大学当局がはっきり認識するに至る 中国共産党機関紙「紅旗日報」に連日同文書院中国人学生授業ボイコットの記事 | ㊽史惠康 | |
| 1931 | 卒業生6名 日本見学旅行実施 8月廃止決定 転学先交渉が國民政府教育部と行なわれるものの難航 満州事変直後の在学者は54名 うち9名退学、上海事変後に20名が退学 9月 中国人学生による授業ボイコット「申報」に9月21日付で中華学生会名義で抗日声明発表 | ㊾孫宜生 | 9月満州事変 |
| 1932 | 卒業生2名 日本人学生による「中国共産党外国兵士委員会」結成・反戦運動激化←中国人学生が手引する | ㊿曹芸 | 1月上海事変 3月満州国建国宣言 |
| 1933 | 3月 治安維持法違反容疑で書院生大量検挙・外国兵士委員会崩壊 | ㊽ | 3月日本は国連脱退 |
| 1934 | 3月 最後の学生4名卒業、廃止 | | |